

## 第 38 回 甲南英文学会研究発表会・講演会レジュメ

場所：甲南大学 1 号館 132 教室

研究発表 14:00~16:00

### 1 [ 英語学部門 ]

司会：Andrew Martin (甲南大学)

Acquisition of Obstruent Devoicing in Japanese Loanwords by Taiwanese Learners of Japanese: An Experimental Study of Phonological Judgements

橋内每歌 (台湾大学大学院入学予定)

In this study, one of the phonological phenomena peculiar to the Japanese language, obstruent devoicing in loanwords, was examined using a naturalness judgement experiment to investigate whether Japanese learners perceive this phonological rule, taking Taiwanese learners as an example.

Originally, voiced obstruent geminates such as [bb, dd, gg] were restricted to occur in Japanese Wago (Japanese origins) and Kango (Chinese origins). However, as foreign words were borrowed, words with voiced obstruents, such as doggu (dog) and eggu (egg), started to be used. According to Nishimura (2003), devoicing of obstruents can be caused both by Lyman's Law (OCP), which prohibits two voiced obstruents within the same stem, and geminate consonants. Kawahara (2011a) conducted an experiment to confirm the naturalness of devoicing. In this experiment, native speakers of Japanese were asked to judge the naturalness of stimuli in four conditions: (i) OCP-violating geminates, (ii) non-OCP-violating geminates, (iii) OCP-violating singletons, and (iv) non-OCP-violating singletons on a scale of 1 to 5 (5 being the most natural). As a result, it became clear that the devoicing of geminates to avoid an OCP violation was judged to be more natural than the devoicing of the non OCP-violating geminate or the devoicing of the OCP-violating singleton.

Although a large number of studies have been made on the phenomenon of devoicing of geminates in loanwords for native speakers of Japanese, there has been little study done concerning Japanese learners' one. Therefore, in the present study, the prime interest is to investigate whether learners of Japanese acquire this voiced obstruent devoicing rule.

In my experiment, Taiwanese learners of Japanese rated the naturalness of devoicing among the four conditions. Each participant received a stimulus and judged the naturalness of a form that undergoes devoicing of word-internal consonants (e.g. given [baggu], how natural would you find it if it were pronounced [bakku]?)

Statistical analysis using a 2-way repeated measures Anova showed that for both real and nonce words stimuli, the judgment scores differed significantly depending on the GEM(geminates) condition, whereas they did not differ significantly depending on the OCP condition, and there was no interaction. In other words, although Taiwanese have a sense that the occurrence of devoicing is more natural in geminate than in singleton, the violation of OCP does not have a strong influence on the naturalness rating. One interpretation of this result would be that while most phonological phenomena occur with adjacent sounds, OCP is a long-distance phenomenon that prevents the overlap of voiced obstruents within the same stem.

## 2 [英米文学・文化]

司会：秋元孝文（甲南大学）

Sympathetic Plagiarist：『マイ・アントニーア』と共感的同一化の詩学

大谷祐二（甲南大学）

他人に共感し、ときに同一化する——われわれが小説を読むときのこの基本的姿勢は、Willa Cather の *My Ántonia* (1918) において幾重にも強調される。小説の序文における匿名の語り手「私」は、Jim Burden が綴る物語の「最初の読者」として自らを紹介し、ジムの視点を通じてアントニーアを経験しようとするし、Lena とジムは『椿姫』のマルグリットを演じる女優に深く共感し涙を流す、そして、アントニーアをレイプの被害から救うためにジムは（文字通り）彼女の身代わりになる。これらに共通する vicarious な（他人の身になって感じる）構造の反復は、この小説が感傷小説の系譜に連なるものであることを指し示すとともに、他者との共感的同一化の（不）可能性が小説を貫く重要なテーマであることを告げているように思う。

共感という主題を検討する上でとりあげたいのは、小説の中でもっとも邪悪な存在である Wick Cutter である。ウィックは悪名高い高利貸しで、アントニアのレイプを企て、最後には妻を射殺するに至る、まさに wicked なキャラクターである。この小説の中で繰り返される、無惨な結婚生活や男女関係のいわば極致として解されてきたカッター夫妻の関係性は、しかし、奇妙なことに、ほかの男女関係に欠けている強烈な相互依存、相互理解がみて取れる。共感という行為を剽窃の比喻で説明する David Hume の共感論を参照しながら、ウィックの嫌悪すべき行動の背後にも共感や同一化のロジックがあることを検証する。

これまでの批評において、語り手ジムや序文の「私」がキャザー自身の投影の対象として名指されてきたことをふまえつつ、本発表では、作者の同一化のベクトルは、ウィック・カッターにも向けられているという読解の可能性を探りたい。語り手ジムが自身のテキストに名付けた「マイ・アントニア」というタイトルと、キャザー自身の小説のタイトルの一致を重く受け止め、他者の経験や感情を通して（盗用して）自己（の欲望）を認識しようとする「共感する剽窃者」としてのキャザーの戦略を考える。

## 講演会

司会：岩井学（甲南大学）

### ディストピアの新たな恐怖の型

#### —監視される恐怖から監視されない恐怖へ—

高村峰生（関西学院大学国際学部教授）

#### [要旨]

ディストピア的設定を備えた小説や映像作品は、21世紀に入ってから顕著に流行している。2016年の米国大統領選挙時には、ジョージ・オーウェル『1984年』やマーガレット・アトウッド『侍女の物語』などがベストセラーとなり、後者はMGM/Huluドラマ化された。また、同時期にフィリップ・K・ディックの古典的なディストピアSF作品『高い城の男』もAmazonでドラマ化された。また、これに先立ってアメリカでは『ハンガーゲーム』などの大衆的なディストピア作品が流行し、教育現場でも盛んに用いられるようになった。日本に目を移せば、21世紀以降に爆発的な人気を誇るアニメの多く（『鬼滅の刃』、『進撃の巨

人』、『呪術廻戦』、『約束のネバーランド』など) がディストピア的な設定を持っている。

この現象を二つの視点から考察していきたい。一つは宗教的なものの回帰である。二〇世紀のはじめにマックス・ウェーバーが整理したように、近代化は脱宗教化の過程であったわけだが、ハーバマスやベックは二一世紀のグローバル社会における「再宗教化」の傾向を強調している。法によって個人の自由が奪われ、生がもてあそばれる社会を描いたディストピアの流行と、制度によっては規定することのできない宗教的なものへの信の強まりは、分かりやすい善と悪、敵と味方を求める傾向とあいまって、時代精神(という言葉をあえて使うが)を反映した説話的対立軸を提供していると思われる。

もう一つは監視の問題である。ミシェル・フーコーが『監獄の誕生』で論じているように、監獄における犯罪者による権力者の内面化は、近代における国家権力を内在化した国民主体の祖型であり、監視能力は『1984年』などで描かれているディストピア社会でも絶対権力の基盤となっている。監視がデジタル化・インターネット化した現在の状況は『ハンガーゲーム』で描かれており、ここではプレイヤーたちがサバイバルゲームを行う様子が国民的イベントとして国内にライブ中継される。しかし、21世紀になってしばらくすると、監視はむしろ欲望の対象となる状況が現出する。つまり、監視されることよりも監視されないことの方が恐怖なのであり、人が進んで監視されることを欲望する事態が描かれるようになる。これは、たとえば Jonathan Lethem が1994年のデビュー作である *Gun, with Occasional Music* で、クレジット社会におけるスコアの問題を通じて先駆的に示唆しており、スーザン・ソントグも『他者の苦痛へのまなざし』において、進んで写真に写ろうとする紛争地域の当事者たちについて論じていた。これらをヒントに近年のディストピア作品に描かれた「監視されない恐怖」についても考えてみたい。

本発表で扱う宗教と監視という二つの論点は、超越的な視点の有無の問題として密接に関わっている、ということ結論として提出できるようにしたい。